

当事者の 立場に 立って

競輪事業報告書

平成23年度 引きこもり・不登校に対する支援活動補助事業報告
発行：NPO法人登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク



競輪の補助を受けて実施しています。

『当事者の立場に立って』 目次

◎あいさつ —— 1P

◎事業概要 —— 2P

◎精神医療の現場から —— 3P

「不登校・ひきこもりを生きる～発達障害を中心に～」

精神科医・高岡健さん講演録

◎いじめ・虐待・非行の現場から —— 11P

「子どもに寄り添う～いじめ・虐待・非行の現場から～」

弁護士／子どもシェルター「カリヨン」代表・坪井節子さん講演録

◎不登校の現場から —— 17P

「不登校・ひきこもりを考える～ありのままを受けとめ、多様な

ニーズに応えるかかわり～」

NPO法人登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク

代表理事・奥地圭子講演録

◎不登校経験者の立場から —— 23P

「子ども若者シンポジウム」

不登校経験者

齋木彰太さん、彦田来留未さん、石井志昂さんシンポジウム抄録

ごあいさつ

わが国の不登校は、文科省学校基本調査によれば、小中学生で12万3000人とされています。1975年より増加の一途をたどり、最近では約10年横ばい状態です。

不登校は、たんに学校を長く休むということだけではありません。不登校状態になるまでに、いじめ、虐待などで傷ついたり、ストレスいっぱいで疲れきったりしています。そして、不登校そのものが、なかなか理解されず、罪悪感・劣等感を強く感じ、人が恐く、ひきこもる場面も生じます。身体症状がおさまらなかったり、夜昼逆転、ゲーム漬けの生活が続くため、親も不安から口うるさくなり、親子関係の悪化が見られたりします。本人も不安や自己否定感から苦しいところに追いつめられ、家庭内暴力や神経症、リストカットなども出ることがあり、医療機関につながることも昨今多くなりました。なかには過量投薬や強制的に入院させられる状況があり、医原病が疑われるケースも出現しています。

そんななかで、親の会の存在意義は大きく、その世話人の人たちの理解を深めるための学習は欠かせないものです。とくに最近は、不登校と虐待、不登校と発達障害をからめて考える必要も増えています。

そこで、年に2回、全国から集まる世話人交流合宿で、精神科医の高岡健さんを高知合宿に、弁護士の坪井節子さんを東京合宿にお呼びし、学習を深めました。

また、親の会世話人、フリースクールスタッフ、不登校の子を持つ保護者など一般の方を対象に、奥地の講演と不登校体験のある3人の若者に登場してもらい、シンポジウムを行ないました。私たちは、つねに当事者から学ぶことが基本だと考えてきたからです。そして、当事者の話は、当事者から考える視点の大切さをとても感じさせてくれます。

この冊子は3本の講演・シンポジウムの抄録ですが、読んでいただくとわかるとおり、共通して貫かれている大切な点は、不登校、ひきこもり、いじめ、虐待、発達障害……、そのどれもが、子どもつまり当事者に寄り添うこと、そして、当事者から学ぶことだということです。なにが子どもを元気にさせるのか、どうしたら自己肯定感が培われるのか、この点にかかっているといっても過言ではありません。

この冊子が悩んでいる多くの人の目に触れ、いま一度、子どもとのかかわりを見直していただけすると幸いです。

**NPO法人
登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク
代表理事 奥地圭子**

事業報告

■事業目的・概要

日本の不登校は1970年代から増え続け、現在でもなお、子どもたちの諸問題の中で大きな問題として取り上げられています。登校拒否・不登校を考える全国ネットワークは1990年より、それまで全国にあった不登校の親の会を中心にネットワークを組み、この問題に長年関わってきました。今回、不登校の問題に関わっている親の会の世話人たちの相談活動の充実を目指し、研修会を実施しました。また、不登校やひきこもりなどで悩みや不安をお持ちの方を対象に講演会も実施しました。

■事業内容

上記の目的を達成するために、不登校・ひきこもりに関して研修会(2回)、講演・シンジウムを行いました。

(1)指導者研修会(2回)

全国各地にある不登校関係の親の会のスタッフやフリースクールのスタッフに対し、講師を招いての研修、各地の情報の共有・交換、テーマを決めてのディスカッションを行ないました。

1) 1回目

実施日：2011年7月22日(金)～23日(土)

実施場所：高知県高知市

内 容：①参加者のによる情報交換・意見交換
②高岡健氏(精神科医)による講演会

2) 2回目

実施日：2012年2月25日(土)～26日(日)

実施場所：東京都中央区晴海

内 容：①参加者のによる情報交換・意見交換
②坪井節子氏(弁護士)による講演会

(2)不登校・ひきこもりに関する講演会・シンポジウム

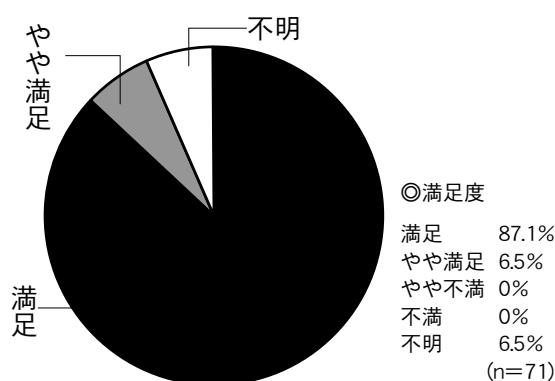
親の会スタッフ、フリースクールスタッフ、一般の方を対象に講演・シンポジウムを行ないました。

実施日：2011年9月24日(土)

実施場所：北海道札幌市「りんゆうホール」

内 容：第1部 講演会 講師：奥地圭子(当団体代表理事)
第2部 若者(当事者)シンポジウム

■事業評価(アンケートより)



■参加者の声(アンケートより抜粋)

- 既存の学校のみが学ぶではないということ、ありのままを受け止めるということを学ばせていただきました。
- 当事者の方のお話を聞いて、何か元気をいたきました。
- 当事者のシンポジストの話を聞いて、一人ひとりの状況や「思い」を知るよい機会になりました。
- 今の日本の教育、大切なことは何か、もっともっと議論が必要だと思いました。
- いろいろな育ちがあっていいと、あらためて思いました。

不登校・ひきこもりを生きる ～発達障害を中心に～

2011年7月22日
精神科医 高岡健

近年、「発達障害」が大きな注目を集めている。「自閉症スペクトラム障害」「アスペルガー症候群」「注意欠如／多動性障害」「学習障害」など多岐にわたる。さまざまな本が出版され、フリースクールや不登校の子を持つ親の会などでもしばしば話題にのぼる。では、具体的に発達障害を持つ子ども・若者とどう向き合えばいいのか。精神科医・高岡健さんを講師に招き、お話をいただいた。

今日は「不登校、ひきこもりを生きる」というテーマについて、「自閉症」を中心とした発達障害に関する話をしたいと思います。最近は発達障害に関する本も多く出版されるなど、一種のブームになっています。発達障害という言葉が生まれたのは1970年代のアメリカで歴史はまだ浅く、当初は身体に関する障害を指す言葉でした。その後、自閉症と呼ばれる人たちも含めて発達障害と称するようになった背景には、アメリカ国内で起こった公民権運動が大きく関係しています。

当時のアメリカは「中流階級以上の白人でなければアメリカ人ではない」という白人至上主義の風潮がいまだ根強く残っていました。そのなかで、アフリカ系やヒスピニック系の人々、そして障害を持つ人々が「私たちにもアメリカ社会のなかでしあわせに生きていく権利がある」と訴え、人種のちがいばかりでなく、身体・知的障害を含めた障害を持つ人々が少しずつ権利を獲得することができたのです。言い換えれば、発達障害とは、社会で生きていく権利を獲得する

動きのなかで生まれた言葉です。

ところが、いまの日本ではちがったかたちで用いられています。「個人の特徴であり、治していかなければ」と矮小化されてしまうこともしばしばです。しかし、「発達障害に関わる」ということは本来、「発達障害の特徴をそのまま残して、そのままのかたちで、世の中をのびのびと生きていくための関わりをつくる」ということなのです。

■自閉症、3つの特徴

現在、「自閉症」の人は100人に1人いると言われています。自閉症は正式に「自閉症スペクトラム障害」といいますが、最近ではやや縮めて「自閉症スペクトラム」と呼ばれることもあります。では、具体的にどのようなものか。そこには3つの特徴があり、その特徴を乳児期から持っているということです。ですから、思春期になってその特徴が急に出てくるということはありえません。これらは搖るがない定義として覚えていただきたいと思います。

3つの特徴の一つ目が「対人関係」です。乳児でしたらお母さんが抱っこしてあげたときに視線が合わない。幼稚園ではお遊戯を極端にきらう、もしくは関心を示さずに別の遊びをしているなど、対人関係における苦手さが顕著に現れます。小学校に上がると、集団での一斉行動が求められますから、子どもが困惑する場面が増えます。たとえば、運動会の練習です。前へならえとか行進など、理屈をきちんと説明されずにくりかえし練習させられます。自閉症の子どもは「理屈がわからずに、とにかくやらされる」ということが極端に苦手です。これも対人関係の苦手さに起因することです。

二つ目が「コミュニケーションの困難さ」です。コミュニケーションは言語によるものと非言語によるものとに大別できますが、どちらも苦手です。言葉のほうから説明します。2歳になると、2つの単語を用いてコミュニケーションを取れるようになります。「お母さん、抱っこ」とか「アイス、ほしい」というように。言葉の数については年を経るにつれ増えていくのですが、大人になってあまり増えない場合もあります。また、言葉の裏を読むのが苦手な子どももいます。たとえば、「そんなことしていいの?」と言われたとします。これは「○○するな」と禁止のニュアンスを含む言い方ですが、文章にすると疑問文としても見て取れます。結果、一所懸命考えて「いいと思います」と真剣に答えてしまい、かえって相手の反感を買ってしまうなんてこともめずらしくありません。さらに、ジェスチャーや表情から相手の感情の機微を読み取ること、さらには人をだますといったことも、まずできません。

三つ目が「想像力が非常に狭く、かつ深い」という特徴です。つまり「こだわりが強い」という

ことです。こだわりと言っても、時間、場所、対象物など、多岐にわたります。子どものおもちゃであるミニカーを走らせて遊ぶのではなく、一列に並べてその秩序を楽しむという遊びを好むといった場合がその例にあたります。

こうした3つの特徴が乳児期より見受けられるということ、それが自閉症の定義となります。近年、「アスペルガー症候群」という診断名を耳にする機会が増えたかと思いますが、これは上述した3つの特徴を持つつ、言葉の数の遅れがない場合に付く診断名のことです。

■3つの特徴以外にも

自閉症の子どもは3つの特徴のほかにも、共通した傾向をいくつか持ちます。たとえば、「目から入る情報の影響を過分に受けやすい」ということです。耳からの情報処理が苦手という場合が多いのですが、多くは目からの情報処理能力がたいへん優れているということです。さきほどから自閉症の特徴を羅列していることには理由があります。各々の特徴に沿った関わり方をするというのが、子どもへのサポートの根幹だからです。ですから、ほかにも顕著な特徴をいくつかご紹介したいと思います。

「感覚が敏感である」ということもその一つです。たとえば、味覚、嗅覚、触覚です。自閉症のお子さんを持つお母さんから「偏食で困っている」という声を聞きます。これは味に敏感だからこそ好きくらいに現れているのです。ただし、多くの子どもはご飯、パン、麺類を問題なく食べられるので何ら心配ありません。偏食を特徴としている自閉症のお子さんを多く知っていますが、栄養失調になった子どもは一人もいませんから。

匂いに敏感な子どももいます。初対面の女性に近寄っていってクンクンと匂いをかぎ「あば



(たかおか・けん)

1953年、徳島県生まれ。岐阜大学医学部卒業。精神科医。岐阜赤十字病院精神科部長などを経て、現在、岐阜大学医学部准教授。著書に『16歳からのくこころ>学』(青灯社)、『不登校・ひきこもりを生きる』(青灯社)、『発達障害は少年事件を引き起こさない』(明石書店)など多数。

さん、香水くださいね」と、悪気なく言ってしまうことがあります。また、触る・触られるということに非常に過敏な子どももいます。大人がスキンシップのつもりでポンッと肩を叩いただけでも、当人としては殴られたような気分になることもあります。

このように特徴はいくつもありますが、もっとも顕著なのはやはり視覚に関することです。非常につらい記憶を写真で切り取ったかのように鮮明に覚えていることも、けっして稀ではありません。ですから、何かのきっかけで思い出し、急に泣き叫ぶということが往々にして起こります。

■適切なサポートとは

では具体的に、自閉症の子どもが困るのはどういった場面なのか。一つは小学校に入学するときです。自閉症に共通する特徴として、初めての場所や体験というのがとても苦手です。これはさきほどの「こだわりの強さ」とも大きく関係していることで、急激な変化にうまく対応でき

ないためです。言い換れば、前もって知っていることや伝えられていることについては問題なく対応できるということになります。ですから、小学校に入学するときは、通う学校を入学式前に見せておくとか、担任となる先生に会わせておくなど、情報を得意な視覚からあらかじめ伝えておくことが肝要です。遠足や修学旅行についても、学校側は下見に行くので、風景や旅館の写真などを見せてもらうだけで、本人の緊張や不安感はだいぶ軽減されます。さらに、家を出でから帰宅するまでのスケジュールを表にして、本人が目で見て確認できるようにすると、なあよろしいのではないかと思います。自閉症の子どもたちへの対応については、さまざまな本が出ていますが、専門書など読まずとも、上述した特徴を考慮すれば適切なサポートは、あのずと思いつくものなのです。

こうしたサポートについて、大人から子どもへの一方向的なイメージに感じられるかもしれません、そんなことはありません。自閉症の子どもと関わるというのは「文化のちがう国に住

む人どうしの交流」というイメージで考えていただければいいと思います。外国人と日本人との交流と同じであると考えていただければ、双方向的であるということがわかっていただけのではないでしょうか。ただ、こういう言い方をすると、「平等が一番、差別はいけない」とあっしゃる方がいますが、それは古い考え方です。冒頭で触れたとおり、そもそも「同じ人間だからではなく、ちがう人間だからこそ仲よくしましょう」という考え方のほうが新しいのです。ですから、文化がちがうということはけっして差別的な言い方ではありません。むしろ、あたがい仲よくやっていくために相互の文化を理解するということは、もっとも重要な出発点になるわけです。そう考えると、自閉症の特徴を踏まえてサポートをすることは、自閉症という文化を理解しようとするに他ならないのです。

■「AD／HD」(注意欠如／多動性障害)へのサポートとは

しかしながら、最近は「凡人に合わせられるように訓練・指導することがサポートである」とかんちがいしている方が多い。自閉症の子どもは多動であることが多いのですが、小学校などではまわりの子どもに合わせるため、じっと席についている時間を少しづつ長くしていくことがサポートだと思っている先生も多いのです。この方法はあまりいいとは思えません。5分しか座っていられない子どもだったら、その5分でできることを教えてあげればいいわけです。というのも、成長とともに、集中できる時間は自然と長くなっています。ですから、5分でも10分でも、その子が集中できる時間内に身につく内容を教えていくことがとても大切だと思います。

多動に関しては、「AD／HD」(注意欠如／多動性障害)という言葉を聞いたことがある人も多いのではないかでしょうか。その診断を受けた子どもでもやっぱり、年齢を重ねるごとに多動は自然と減っていくものなのです。

では、AD／HDの子どもをどうサポートしていくかについてですが、「何もいらない」というのが私の考えです。注意について言えば、人間という生き物は集中する時間が持続していると精神に変調をきたします。集中してない時間があるからこそ健康を保てるわけです。ゆえに、注意を促そうとしたり、集中する時間を無理に長くさせようといったサポートは必要ありません。くりかえしになりますが、3分でも5分でも10分でも、その時間内でできる学びはかならずありますから。

AD／HDの特徴は、多動、注意欠如、段取りが下手、おしゃべりなどが挙げられます。段取りが下手というのは、たとえば忘れ物です。遠足で大事なお弁当を忘れてしまうといったことです。これは手伝ってあげればすむ話です。その際、「最初から手伝って、最後の一つを本人に任せる」場合と、「最初は手伝わずに最後だけ手伝ってあげる」場合、どちらが好ましいか。言うまでもなく、前者です。最後だけ自分でやったほうが達成感や満足感が大きいからです。この気持ちを本人が持てるか否かが非常に重要です。ポジティブな気持ちになれば「またやってみよう」という気もあきます。逆に最後だけ手伝ってしまうと「やっぱり最後は親に助けてもらわなきゃダメだ」とネガティブにとらえてしまうことがあります。「やっぱり僕はダメだ」と思いこんでしまうこと、これはAD／HDの子どもをサポートするうえで気を付けなければならない点です。さきほどの例に戻りますが、要するに「5分

しか集中できない」と怒るのか、「5分も座ってられるね」と褒めるのかということです。もちろん、褒めなほうがいいに決まっています。褒めれば、「次は6分にしよう」と提案しても乗ってきてくれますから。「かならずできる5分」ということを目標にし、小刻みに目標の時間を上げていく。それが一番いい方法だと思います。

『もじゅもじゅペーター』という絵本をご存知でしょうか。「厳しいしつけの本」という感じで個人的にはあまり好きではないんですが、1845年に出版されて以来、ずっと売れ続けている絵本です。

絵本にはフィリップという少年が登場します。両親と食事中、フィリップはイスをガタガタ動かしたり、テーブルクロスをつかんで後ろに倒れ、お皿や料理を床に落としてしまい、両親に怒られます。フィリップはAD／HDであろうと推測できますが、要するに「食事のときは静かに食べましょう」ということを伝えたいのです。当時、AD／HDなんていう言葉はありませんが、落ち着きのない子どもに対する非難のまなざしがすでに存在したということがわかります。

しばらくして、ドイツ、フランス、イギリスなどで、地主や貴族を倒してブルジョアが力を持つていくという「1848年革命」が起こります。ブルジョアの思想というのは、勤勉、品格、自助、節約に重きをあいています。これらはブルジョアが貴族を打倒するためにはじめに掲げた言葉です。つまり、『もじゅもじゅペーター』とは「落ち着きがないと立派なブルジョアになれませんよ」という教訓を絵本にしたものなんです。

「統合失調症」がかつて「精神分裂病」と呼ばれていたように、診断名は時代とともに変わることがあります。AD／HDも当時は「道徳性の制

御不良症候群」という、何とも恐ろしい診断名でした。「高度化する産業社会では、ちゃんと落ち着いて自分の行動をコントロールできないといけません」という思想的な部分が診断名に含まれているわけです。

そうしたなかで進められたのが、脳の研究です。落ち着きがない原因として脳に何かしら異常があるはずだと。多くの研究者によって研究がすすめられましたが、結局何もわかりませんでした。そこで、研究対象は多動から注意欠陥に移りました。その際、脳の研究を続けるのではなく、「認知に障害がある」というあいまいな表現で説明づけようとした。「認知」なんていうのは非常にあいまいな概念ですから、科学的根拠に基づいて証明できなくてもいいわけです。

そのうち、多動性の研究、注意欠陥の研究の双方をくっつけて考えるという研究者が増え、「注意欠陥／多動性障害」という言葉が生まれました。つまり、AD／HDとは、まったく異なるものをくっつけた造語にすぎないです。

その証拠を残すのがいやな人たちがスラッシュを消し、一語として使われるようになったというのがAD／HDの歴史的背景です。最近はスラッシュが復活し、訛語も注意欠如／多動性障害となっています。

この点から見ても、また、産業ブルジョアジーの価値観を子どもに幼少時から植えつけるためのものだという背景を踏まえても、AD／HDに対して特別な支援を行なうということはあまり必要ないわけです。

最近ではこの分野にもさまざまに予算がつけられていますが、どうせならば自閉症の子どもへの支援にまわしたほうが効果的です。自閉症との交流は異文化の交流ですから、お金も人手も必要だからです。

■自閉症と不登校

医師のなかには「自閉症を持っていない子どもの不登校は問題ないが、その逆の場合は放つておいたらたいへんなことになるので、何とか学校に行くようにしなければならない」と、大マジメに語る人がいます。この言説には、なんら根拠がありません。先ほど、異文化の交流という話をしましたが、いまの学校教育における問題点は、異文化の人をきちんと受け入れる素地がないということです。素地がないから当人が学校になじめなかったわけで、異文化の人を受け入れる体制が整っていることが視覚的に伝わり、かつ本人が論理的に納得できるのであれば、学校に再び戻るということは選択肢として成り立ちます。それをせず、一方的に子どもにコミュニケーション能力を身につけさせて学校に戻そうとする発想・やり方は非常に問題だと思います。そういう意味では、一般的な不登校も、自閉症を持っている子どもの不登校も、基本的な考えにおいて、さほど大きなちがいはないというのが私の考え方です。

もちろん、まったく同じというわけではありません。『あたし研究 自閉症スペクトラム～小道モノの場合～』には、いじめを題材にして次のように書かれています。自閉症を持っている子どもと持っていない子どもの双方が同じいじめを受けた場合、気づきの面でちがいがあるということです。

とくに自閉症の子どもがいじめを受けている場合、いま自分が受けていた仕打ちが「いじめである」と気づけないことが往々にしてあります。そうでなくとも、自閉症の子どもにとって、世の中は不思議なことだらけです。自分が受けているいじめを、不思議な物事の一つとして認識してしまっている場合、それがいじめであると気

づくころには相当ボロボロに傷ついているケースが多いのです。この点は留意しておかなければなりません。

障害の有無に関係なく、不登校の背景にいじめが介在している確率は相当高いと私は考えています。しかし、いじめの事実を子どもは大人に隠します。よって、「いじめのない不登校は認めません、学校に行きなさい」と、いじめの有無だけで不登校を認めるか否かというケチな考え方で子どもと向き合っていると、あとで後悔することになると思います。大人がいじめの事実を知らないだけで、実際はいじめが存在する場合がえてしてあるからです。それをもっと極端にしたのが、自閉症の人が被害にあっている場合なのです。

もう一つ留意すべきは、不登校をした子どもに「何もせずに家でゆっくり休んでいい」と言うと、自閉症の子どもにとってはつらいことになってしまうという点です。自閉症の子どもはやることが決まっていて、自分の頭のなかにスケジュールが入っていることで初めて安心できるので、「何もせずにゴロゴロしていい」というのは、かえって苦痛でしかないです。ですから、家で何をするか、きちんと予定を組み立ててあげたほうが、本人にとってはすこしやすいことが多いのです。そういう点を別にすれば、一般的な子どもの不登校と自閉症の不登校の場合と基本的な点ではちがいはないと考えてさしつかえありません。

■学習障害のサポートとは

発達障害のなかには、「学習障害」も含まれます。教育学の分野では広い範囲で考えられていますが、医学の分野では非常に狭義の場合に用います。学習障害は大きく3つのタイプに分かれ

ます。「算数障害」(計算ができない、数の概念がわからない)、「読字障害」(字を読むのが苦手)、「書字障害」(字を書くのが苦手)の3つです。数の概念が理解できないということについては、「2つのかごがあって、一方にリンゴが2つ、もう片方に3つのリンゴが入っている。では、リンゴは全部でいくつでしょう」という問題を出されているにもかかわらず、かごの数を答えてしまうといったことが一例に挙げられます。

では、学習障害の子どもたちをどうサポートしていくか。「算数障害」については電卓を使えばほとんど問題ありません。「書字障害」を持つ子どものなかには、漢字の書き順がめちゃくちゃであることが多いです。自閉症にもみられますが、漢字を写真で撮影したように一つのかたちとして捉える人は書き順などは関係なく、上からなぞるように漢字を書きます。必然的に、止めとか払いといったことができませんが、だからといって日常生活のなかで困ることはあります。以前、中国の書道家が習字しているのをじかに見たことがあります、私たちが文科省から習った書き順をいっさい無視していました。歴史の浅い、根拠のない書き順などにこだわるなんて、文化の冒涜だと私は思います。また、読める人はパソコンのワードなどを活用すれば、手書きにこだわる必要はありません。

「読字障害」についてですが、地域の図書館で本を借りて読んでいるとき、本文に横線の書き込みがあったなんて経験、みなさんにもあるんじゃないでしょうか。けしからんなと思うこともあります、おそらく「読字障害」の人が借りて読んだのではないかと思います。赤ペンや蛍光ペンなど、文章に線を引きさえすれば読める人は結構います。また、字のフォントを変えるとか、拡大コピーするなどして文字そのものを大

きくすることで、今までよりスムーズに読めるようになるという場合もあります。

ですから、電卓やパソコン、拡大コピーなどを使うことで、学習障害を持つ子どもに対しての支援は、あおよそできると思います。ベテランの先生であれば、すでに取り組まれている方も多いし、納得いただけのではないかと思います。「学習障害」なんていう名前をわざわざ付けてラベリングするだけでは意味がありません。ラベリングをするならば、それに見合うサポートをセットにして考えておかなければいけないと思います。

■自閉症文化との交流

最後に、自閉症文化との交流ということを総括する意味で、一つの例を挙げたいと思います。『イワンの馬鹿とその兄弟』というトルストイの民話集があります。あの本を、自閉症の人たちが国家をつくったらこうなるのではないか、と思って私は読みました。

イワンには3人の兄弟がいます。一番上の兄は軍隊をつくり、いろいろな土地を占領していました。しかし、イワンにとって兵隊は「歌を歌う人」でしかない。二番目の兄は商人で、土地を買い占め、多額のお金稼いでいきます。しかし、イワンにとって金貨はヒマなときに子どもと遊ぶおもちゃでしかない。ですから、イワンは何にもいらないわけです。兵隊もお金もいらない。そのイワンがある拍子に国家をつくり、王様になった。その国の人たちはみんなが平等です。つまり、個人としての人間が連合しただけという、世界中でただ一つの国家を築いたのです。

ある日、年老いた悪魔がイワンの国にやってきました。悪魔は「みんな手で働いているが、本当は頭で働かなくてはいけない」と民衆に向か



講演会のようす

って大演説します。イワンの国の人々にとって、頭で働くというのはどんなことか見当もつきません。しかし、どうもすばらしいことらしい。お金も儲かるし、頭を使えばなんでもできるという。ということは、この悪魔は何でもできるすごいやつにちがいないと思い、わざわざご飯や水を差しいれる必要はないだろうと民衆は考える。

2時間も3時間もしゃべり続けていた悪魔は空腹とのどの渴きにふらつき、演壇の上から真っ逆さまに落ちてしまいました。はしごに頭をぶつけながら落ちていく悪魔。それをみた民衆は「なるほど、頭で働くということは、頭が痛くなるほどたいへんなことなんだ」ということがわかる、というオチです。

こういう個人連合の上下もない社会というのは、自閉症の人たちであればつくれるんじゃないかと思います。あの民話はそれを示しているのではないかと。もちろん、過去に国家をつくった人はいないし、それどころか圧力団体さえつくった歴史はありません。

なぜなら、自閉症の人たちは個人を優先しているため、国家という概念がそもそもその発想にないのです。でも、自閉症の人たちが仮に国家をつくったなら、その国家は人間としての文化度がとても高く、人間の本質というところに一番

近いのではないか、と私は思います。というのも、私たち凡人は駆け引きをしたり、裏を読んだり、空気を読んだりします。

そうした生き方は、人間が持っている一番大切なもののからどんどん離れていき、不自由な存在になっているのではないかと。つまり、成長や発達といった、私たちがよいものと信じ追い求めているものは、じつは私たちにとってプラスのものではなく、自由さを縛り、不自由さを増していくだけのものでしかないのではないか、と考えさせられます。

自閉症の子どもや青年と関わる仕事をされている方のなかで、彼らとあしゃべりをしていると、ほっとした気持ちになるとあっしゃる方がいます。もちろん、仕事自体はたいへんなのですが「だからこそ、やりがいがある」と。

そう感じる理由として、自閉症の人たちは、私たちが捨ててきた一番大切な「個人」というものを、きちんと持っているからではないかと思います。ゆえに、私たちは、自閉症の文化との交流によって、得るもののが非常に多いのです。向こうはそれほどでもないかも知れませんが。自閉症の子どもたちと関わるうえで大切なことは、文化の交流という視点に立って向き合うことなのです。

(抄録)

子どもに寄り添う ～いじめ・虐待・非行の現場から～

2012年2月26日
弁護士 坪井節子

いじめ、虐待、非行により「今日生きるか死ぬか」の瀬戸際に直面している子どもたち。そんな彼らの声に耳を傾け、支え続ける活動をしている弁護士の坪井節子さん。日本初となる子どもシェルター「カリヨン子どもの家」を立ち上げるなど、「あなたに生きてほしい」と一貫して訴え続けている。つらい状況にある子どもたちに寄り添う中で見えてきたものとはなにか、お話をいただいた。

弁護士になって30年、小さな弁護士事務所を切り盛りしつつ、「カリヨン子どもセンター」の理事長を務めています。今日は私がこれまで出会った子どもたちの声をもとに、子どもに寄り添うことの意味、その大切さについて考えあえたらと思います。

1987年、東京弁護士会が「子どもの人権救済センター」を立ち上げました。センターでは、子どもたちからの電話相談や無料の面接相談などに弁護士があたっています。私も立ち上げから関わってきましたし、子どもたちの生の声に多く触れました。当初、寄せられる内容でもっとも多かったのはいじめでした。弁護士という仕事は、苦しんでいる当事者の話を聞かないと何も始まりません。しかし、それまで「日本の子どもは幸せだ」と思い込んでいた私にとって、驚きと無力感に打ちひしがれる日々の始まりでもありました。相談に来る子どもたちは生きるか死ぬか、というところまで追い詰められていたんです。なぜその事実に気付けなかったのかと自分を責め、弁護士として何の解決策も示してあげられ

ない現実に、逃げ出したいと思うこともありました。あれから25年、なぜ現在も相談員を続けていられるのか。一番大きかったのは、子どもたちからの教えと励ましです。子どもたちと向き合うなかで教えられ、励まされた経験がなければ、私はいま、この場に立っていないだろうと思います。

■いじめ～中3男子の場合～

ある中学3年生の男子生徒からの相談で、いじめとはどんなものを教えられました。彼が進学した有名私立中学校では、すさまじいいじめが起きていました。中学3年生の夏休み明け、彼がいじめのターゲットになってしまいました。昨日までいっしょに遊んでた友だちがいっさい口をきいてくれなくなり、彼がいやがるあだ名を連呼され、黒板に悪口を書かれる毎日。彼は読みたくないマンガを読み、見たくないお笑い番組を見て、みんなと共に話題を一生懸命探しました。性格も変え、あたかもピエロのようにふるまい、何とかもう一度仲間にいれてもらおう

と努めました。しかし、何も変わらないどころか、よりエスカレートしました。自分をズタズタにしてがんばったにもかかわらず、いじめは続く。卒業まであと3ヶ月というところで彼は一つの結論にいたりました。「何をやってもダメだ、僕がいなくなればみんなは喜ぶんだ」と。彼は学校に行けなくなりました。そして、両親が望むエリートコースをもう歩けないとなつたとき、自分の将来が見えなくなりました。

「僕はもう学校へ行けないと、両親に告げました。しかし、親から返ってきたのは「なに弱音を吐いてるんだ。がんばりなさい、強くなりなさい、あと3ヶ月でしよう」という励ましたでした。じつは、両親に心配をかけまいといじめの事実をひた隠しにしていたのです。当時を彼はこうふり返りました。「命の綱がツンツと切れを感じがした。やっぱり僕が悪いんだ。親はもっと強くなれとしか言わない。でも、僕はもう強くなれない。弱い僕、学校に行かない僕、そんな僕は死ぬしかない」。

■自殺未遂の末に……

冬休みに入ると、彼は死ぬ方法を考えつづけました。そして、ある薬を80錠飲めば死ねるとわかり、あこづいで薬を買い集め、3学期の始業式当日、遺書を書いた後に50錠飲みました。さいわい、意識朦朧となっているところを両親に発見され、一命を取り留めました。遺書を読み、両親はわが子がどれほど苦しんできたのかを初めて知りました。そして、「学校なんか行かなくていい、お前の命のほうが大事だ」と、初めて言ってくれたそうです。その一言に彼は「もう一度生きてみようかな」と思ったそうです。親の一言が子どもに生きる勇気を与えることもあれば、絶望の淵に突き落とすこともある。子どもにとっ

て、親とはなんて大きな存在なのかと思いました。

彼は最後に言いました。「80錠飲めば死ぬと書いてあった薬を、なぜ50錠だけ飲んだのか。本当に死にたかったわけじゃない。でも、毎日が地獄のように苦しかった。そこから抜け出す道は死ぬしかなかった。だから五分五分にかけた」。

彼は生きたかったんです。だからこそ、3ヶ月間自分をズタズタにしながら一生懸命戦ったんです。寄り添ってくれる人がいないなか、真っ暗な闇のなかを孤独に歩くしかなかったのは、どれほどさびしかったことか。彼の話を聞きながらうろたえるだけの私に「子どもの話をこんなに一生懸命聞いてくれる大人がいるとは思わなかつたよ」と彼は言いました。その言葉で私がどれだけ救われたことか。具体的な解決策を示せなくても、15年間生きた彼にとって私は、初めて自分の話を聞いてくれる最初の大人になれた。いっしょに悩み続けること、そしてとにかく生きてとメッセージを送り続けること、彼はその大切さを私に教えてくれました。

■虐待～16歳・女の子の場合～

近年、子どもからの相談内容に変化がみられるようになりました。全体の8割を占めていた学校問題が減り、かわって増え始めたのが親子の問題です。虐待、非行といった家族に関わる相談が半数を占めます。

ある16歳の女の子のことをお話ししたいと思います。彼女に会うきっかけは、家庭裁判所に頼まれ、彼女の付添弁護人を引き受けたことでした。覚せい剤取締法違反で逮捕されたのです。いつから始めたのかを聞くと「中学2年生から」と言われて驚きました。シンナーは小学校5年生から吸っていました。理由については「見たくない



(つばい・せつこ)

1953年、東京生まれ。1987年より東京弁護士会子どもの人権救済センターや日本弁護士連合会子どもの権利委員会等で子どもの人権救済活動に携わる。現在、カリヨン子どもセンター理事長、2女1男の母。おもな著書に『子どもは大人のパートナー』『子どもの人権双書』(以上、明石書店)など多数。

ものがたくさんあったから」とだけ話してくれました。

3人姉妹の長女として産まれた彼女は両親との5人家族。父親が暴力をふるう人で、母親が暴力に耐えかねて夜中に家を飛び出すこともよくありました。すると、暴力の矛先は寝ている子どもに向かいいます。妹たちを守るために、彼女は自分が身代わりになりました。身を守るために金属バットを手にすると、父親は持っていたビール瓶を割り、彼女に振り上げることもありました。ただただ耐えるしかなかったのです。幼稚園にも小学校にも通っていましたが、虐待の事実には誰も気づいてくれませんでした。

小学5年生になってやっと家を飛び出しができましたが、深夜に10歳の子どもが行くところなどありません。同じように家にいたくない子どもがたむろしているところに入っていくしかなかった。「これを吸えばいやなことを忘れられる」と差し出されたのがシンナーでした。10歳で、背負いきれないほどの重荷を背負い、誰にも相談もできず、誰も助けてくれず、その苦しみ

を全部忘れるためにシンナーを吸ったんです。いったい誰が彼女を責めることができるでしょうか。

警察に補導された彼女は再び、父親から暴力を受けました。母親には「あんたみたいな悪い子は死んじまいな、あんたみたいな子、生まれてこなければよかったんだよ」と罵られました。

自分は生きていても死んでいてもどちらでもいい存在。そう思った彼女は自傷をくりかえしました。中学校では、世間一般に非行と呼ばれることは何でもやりました。授業妨害、エスケープ、喫煙、暴走族に入る、リンチをしたりされたり……。何度も家出をくり返すうちにヤクザに拾われました。そこで覚せい剤を注射され、売春を強要され、16歳の彼女はボロボロになりました。私はずっと自問自答していました。なぜこんなになるまで社会から追い出され続けなければいけないのか。どうしてここまで苦しんだ彼女が司法の裁きを受けなければいけないのか。「シンナーや覚せい剤は法律で禁止されているからやめましょう」なんてことが通用するなら苦労

なんてしません。「死刑になる」と言われたって子どもは犯罪に走ります。厳罰化が子どもの非行を防げると言う大人は、子どもがなぜ非行に走るのか、その背景を知らなさすぎです。ここまでやったらまずいということを計算できる子どもは、非行には走らないのです。

私が彼女に言えることはただ一つ、「私はあなたに生きてほしいと願っている。それだけは信じて」ということだけ。彼女は「この人は何を言っているんだろう」という表情を浮かべ、キヨトンとしていました。

■親になり、自分が寄り添う側に

裁判所の判断は、彼女を少年院に送致するというものでした。審判の3日前に裁判所からそう告げられた彼女に毎日会いに行きました。彼女に笑顔はなく、「もう帰っていいよ!少年院を出たら極道になってやるから!」と怒鳴り出しました。「それはちがう、少年院は刑務所とはちがうんだよ。今までのようく苦しまずにどう生きていくか、それを考える場所なんだよ」。そう言いながら、私はあなたを待っていると何度も伝えました。それでも、一言も口をきいてもらえず、なんともみじめでした。しかし審判の日、彼女は笑顔で面接室に入ってきました。夢のなかに先輩が出てきて「少年院に行って、いい子になって帰っておいでと言われた」というのです。

虐待を受けてきた子どもたちは大人を信じません。信じてまた捨てられるくらいなら、最初から信用なんてしないほうがいいと考えるからです。だから、私がちょっと優しい言葉をかけたところで信用するわけがありません。私はひたすら寄り添うことしかできなかった。それをずっと見ていた彼女は「この人は一次試験にパスさせてあげようかな」と思ってくれたのではない

かと思います。

1年後、少年院を出てきた彼女には帰る家がありませんでした。パチンコ屋に住み込みで働き始めましたが、周囲の大人にいじめられて3ヵ月で寮を飛び出しました。歳をごまかしながら風俗で働き、暴力をふるう男につかり妊娠、出産。命からがら逃げだしてキャバレーで働きました。しかし、そこでも給料不払いのままクビになるなど、本当にたいへんな人生を生き抜いてきました。もうどうにもならないというとき、彼女は私に電話をくれました。お金を貸してほしいと言われたこともありましたが、断りました。その代わり、暴力をふるう男との関係を断ち切らせる、不払いの給料を回収するなど、弁護士としてできるかぎりのことをしました。

彼女はいま38歳、再婚して4人の子どもを持つお母さんとして一生懸命がんばっています。ある日、こんな話をしてくれました。「この間、公園でシンナーを吸っている中学生の男の子を見つけてね。話を聞くと私とよく似た境遇だった。私はシンナーを取り上げ『シンナーなんか吸うな。お腹すいてんだろ、私の家でご飯食べな』って言ったんだ」と。

それからその子を毎日家に呼び、ご飯を食べさせたそうです。私は驚きましたが、すぐわかりました。自身がシンナーを吸っていたころ、まわりの大人に何をしてほしかったのか。それをよくわかっているからこそ、目の前の少年にしてあげているのだ。

いじめ、虐待、非行などのさまざま問題を抱え、生きるか死ぬかの瀬戸際に追い詰められた子どもたちにとって、人間として生きていくために何が必要か。何が彼らを元気にさせるか。必要なことは子どもにいかにして寄り添うかということです。

その際、子どもたちに伝えるべきことは3つ。1つ目は、「あなたは生まれてきてよかったです」ということ。ボロボロの自分が生きることを願う大人がまわりにいて、自分自身でもそう思えるということ。つまり、命の底支えが大切です。2つ目は、「あなたは一人ぼっちじゃない」ということ。誰かがそばにいて、話を聞くし、いっしょに悩む。そういうパートナーが子どもには必要なのです。3つめは、「あなたの人生はあなたが歩いていい」ということ。転んでも立ち上がり、傷だらけになってしまっても泥だらけになっても、その人生を生きられるのは本人だけです。親ですら代わりを生きてあげることはできませんから。

■シェルターをつくりたい!!

多くの子どもとかかわるなか、ずっと葛藤していましたことがありました。「今夜帰るところがない」という子どもの訴えに応えてあげられないということです。18歳以下の子どもが虐待で家を飛び出した場合、児童相談所はその子を保護する責務を負っています。しかし現実に、「親の暴力から逃げてきました、保護してください」と子どもが来たとしても、かんたんに保護するわけにはいきません。いま、児童相談所や一時保護所は全国的に定員超過状態なんです。3~4人が6畳で寝起きするような状態です。こうした状況を10代半ばから後半の子どもたちはいやがります。結果、行き場を失うのです。

子どものシェルターをつくりたい——。しかし、そこには金銭面のほかにもう一つ大きな問題がありました。親権です。親権者である親には「居所指定権」があります。ですから、民間のシェルターが子どもをかくまったとしても、親から返せと言われて拒否した途端に親権侵害、場合によっては誘拐になってしまうのです。

こうしたなかで1994年、関西の児童養護施設である事件が起きました。入所していた6歳の女の子が年長の子どものリンチにあい命を落とすというものです。日本が「子どもの権利条約」を批准した年でもあり、東京弁護士会でも条約について広く知つてもらうすべはないかと話し合った結果、お芝居をしようということになりました。テーマにその事件を取り上げ、『和子6歳、いじめで死んだ』の原作者・倉本小夜さんにご協力いただき生まれたお芝居「もがれた翼」を上演しました。以降、テーマを変えながら毎年上演を続けています。

「カリヨン子どもセンター」が運営する「カリヨン子どもの家」も、じつはこのお芝居から生まれたんです。2002年の公演で「こんな子どもシェルターがほしい」という私の思いをこめて脚本を書いたのですが、この舞台が大きな反響を呼びました。お芝居を見た人たちからも「こんなシェルターが日本にないとは知らなかった。ないならつくるべきだ」といった声が多く届きました。私たちも東奔西走し、しだいに高まる後押しの声と支援もあいまって、2004年6月、司法、福祉、地域など、さまざまな分野の連携を母体に子どもたちのためのシェルター「カリヨン子どもの家」が開設されました。

小さな一軒家に4つの個室があり、スタッフが常駐しています。そして、親権についても子ども一人ひとりに担当弁護士をつけ、さらに入居申込書を書いてもらうようにしています。入居希望者が18歳未満だった場合には、まず児童相談所に虐待通告をします。児童相談所がそれを受け一時保護を決定し、カリヨンに一時保護委託をするというシステムをつくってもらいました。

入居してすぐはみな、じつとようすを見ていま

す。殴らないし、蹴られない。ご飯も三食食べられて自分でカギを持てる個室までついている。優しく話を聞いてくれるスタッフはどんな大人なのだろう……今までなかつたことがつぎつぎと起こるわけです。しばらくすると、病気になったり、暴言を吐いたり、ほかの子どもをいじめたりと、“試し行動”ができます。子どものエネルギーはすごいですから、スタッフや弁護士はヘトヘトになります。大人はスクラムを組み、「あなたが大事、私たちは無力だけれど、けっしてあなたをひとりぼっちにはしないからね」というメッセージを送り続けます。

あるとき、入居していた子から「カリヨンの人ってアブノーマルだよね。ノーマルな大人は子どもの話なんか聞かないよ。弁護士だから、どうせたくさんお金をもらってるんでしょ?」と言われました。「私たちは寄付集めに走りまわっているし、給料だって1銭ももらっていない。なんでこんなことをするのか、それはあなたたちの命が大事だからよ」と言うと「ウソだあ」と言いながらうれしそうな笑顔を浮かべました。どうやらそんなバカな大人がこの世にいるらしいということがわかってくる。そのときの笑顔はいまも忘れられません。

■子どもシェルター、全国に拡大

「カリヨン子どもの家」が設立されて以降、子どもシェルターは全国に広がっていきました。「子どもセンターてんぽ」(神奈川)、「子どもセンターぱあ」(愛知)、「子どもシェルターモモ」(岡山)をはじめ、広島、福岡、京都でもシェルターがオープンしています。そのほか、宮城、札幌、大阪、高知などでもシェルターを立ち上げようという動きが進んでいます。

こうした子どもシェルターが増え、福祉と医療のはざまで抜け落ちてしまう子が一人でも出ないようにしていきたいです。今後は「もう一度高校に行きたい」と考えている子どもがお金の心配をせずに再チャレンジできるような場所もつくれたらと考えています。

子どもたちと向き合うとき、私がキーワードに掲げているのは「子どもと大人のパートナーシップ」ということです。大人は子どもの支配者ではない、子どもは半人前ではなく一人の人間だ、大人と子どもは尊敬しあいながら手を携えていっしょに生きていくパートナーなんだ、ということ。これらは「子どもの権利条約」と、その翌年に採択された「少年非行予防のためのガイドライン」に出てくる言葉です。子どもと大人は対等かつ全面的なパートナーである、これこそが子どもの権利保障の根幹だと私は思います。

私自身、自分の子育てでも実践してきましたが、なかなか思うようにはなりません。しかし難しくとも、子どもと大人があたがいに尊敬しあい、大人は子どもに「生きてほしい、愛している」と伝える。そのうえ、あなたの人生は自分で歩くものだと伝えられるかどうか。子どもと大人が気持ちのいい関係をつくれるか否かにおいて、「子どもと大人のパートナーシップ」は重要なキーワードだと思います。ご清聴、ありがとうございました。

(抄録)

不登校・ひきこもりを考える ありのままを受けとめ、多様なニーズに応えるかかわり

2011年9月24日
奥地圭子

不登校、ひきこもりの子や若者とどう関わっていくのがいいのか、「ありのままを受けとめる」とはなにか、そして、「多様なニーズ」に応えていくためにはどうしたらいのか。不登校、子どもや親と30年以上、関わってきた当団体代表の奥地圭子。講演では不登校の現場、親の会から見えてきた「原点」が語られた。

今日は「私たち登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク」がどのように不登校を考えてきたのかをお話できればと思っています。また、私たちはとくに当事者の子どもから学ぶということを大事にしてきたので、私が関わってきたことからお話したいと思っています。

■ありのままを受けとめ、 多様なニーズに応えるかかわり

私自身、不登校の子どもたちとの関わりは30年以上になります。学校の教員として、不登校の子の親として、フリースクールのスタッフとして、またフリースクールと学校の中間と言える東京シユーレ葛飾中学校の場で、さまざまなかたちで関わってきました。そのなかで強く思ってきた原点は「子どもはいのちだ」ということです。今日の講演のサブタイトルは「ありのままを受けとめ、多様なニーズに応えるかかわり」です。「ありのまま」というのが「いのちのあり方」だと思っているからです。そして、ありのままを受け止めるからこそ、子どもからの本当の二

ズ、それも多様なニーズが生まれてくる、と。それにどう応えていくかということをお話ししたいと思っています。

■学校に行きたくない子にとっての9月1日

今日はまず9月1日前後のお話からしなければなりません。9月1日前後というのは、学校の2学期が始まる時期であり、毎年、子どもの自死が起きる時期です。ずっと以前から「今年はりませんように」と願っていましたが、毎年、自死が起きます。つまり、夏休みが明けるこの時期には「学校が始まってしまう」と追い詰められた子どもががなならず出ています。今年は札幌でもありましたが、大分県、鹿児島県、三重県、東京都国立市、葛飾区、でもありました。私たちが知らないケースもきっとあるでしょう。報道によれば、札幌で飛び降り自殺した子どもは、いじめを受けていたそうです。1学期から不登校をし、学校、家族、本人で何度も話し合いがもたれたそうです。亡くなる前日にも話し合いがもたれ「学校に行く」と子どもは言ったそうですが、翌日の朝

学校とは別の方に向かい飛び降りたそうです。こうしたいじめ自殺が疑われるケースは、いじめの有無、学校側の対応、子どもたちへの心のケアや心の教育に注目が集まります。しかし、私たちとしては「それだけじゃないでしょ」と。「学校が行かねばならないところ」になっているからこそ、どんな話し合いや学校の対応があっても、子どもは本当の安心感が得られず、まさに生き地獄のように感じてしまう。学校が絶対化されていることを9月の自殺は問うているのだと思いますが、世間や行政は、なかなかその点に気づいていません。そこを考える必要があるのではないかでしょうか。苦しい、つらい、死ぬほどいやだというときに「そこから逃げていい」というメッセージがもっと必要なではないでしょうか。「逃げる」ことに日本人は負のイメージを持っていますが、自分を守るためにには必要なことですし、それこそが「積極的な生きる道」なのかもしれません。

■自分の子どもが不登校に

とはいえる自身、最初からそう考えていたわけではありません。自分の子どもの不登校から大切なことを気づかされたという経験を持っていました。

私の子どもも最初はいじめから始まりました。転校が機です。いじめ以外にも学校の雰囲気に違和感を感じていたこと、クラス運営、いじめへの先生の対応など子どもにとっては不信感になるようなことばかりが重なり、ついには身体症状も出ました。私は身体症状の意味がよくわからず、とにかく体調の悪いときは学校を休ませ、体調がよくなると学校へ押し出すということをくりかえしていました。学校へ押し出そうとするたびに子どもは「学校へ行く」と言いまし

が、実際には行けません。私は言葉の表面だけにとらわれて多くの気持ちを感じていなかつたんですね。とくに子どもが苦しんだのは運動会とその準備です。その学校の練習は厳しく息子は疲れ切っていましたが、運動会に出ないことでのいじめのネタにされるのもイヤ。なのでがんばって練習に行っていました。

そして迎えた運動会当日。運動会は無事終わりましたが、その日、息子が帰ってくると玄関で立てなくなってしまった。トイレに行くにも這っていくしかない。食べ物やジュースを口に入れると全部、吐いてしまう。何も体が受け付けないんです。透明な水しか飲めない。当時は本当にトンネルのなかにいるようでした。何がどうしてこうなったのか。自分の育て方が悪かったんだろうか。仲間の教員からは「甘やかしたんじゃないの？」と言われ、お医者さんに相談すると「愛情不足じゃないですか？」と。まったく逆のことを言われながら、もうぐちゃぐちゃの状態で事態も好転しない状況が続きました。そんな時期に『ひと』という雑誌で知った児童精神科医の故・渡辺位さんのところに行きました。

■渡辺位さんとの出会い

予約後3カ月待ちでしたがその日、最初に「お母さんはそこに座っていてくださいね」と言われ、渡辺さんと子どもの話を2時間、私はじーっと聞いてました。それが私にとってはものすごく学びになったんです。子どもが言ったのは「学校に行くと自分が自分でなくなる気がする」と。息子は学校で苦しかったこと、家のなかで苦しかったことをずっと話していました。横で聞いていた私は「ああ、そうなのか、私がよかれと思ってやったことだけど、子どもは気持ちをわかってほしかったんだ」と痛感させられました。



話を終えて息子は伸びをしながら「お母さん、羽が生えたようにいい気分だよ、こんないい気分は何年ぶりだろ」って。たぶん2年ぶりぐらいです。それから「お腹がすいた、あにぎり食べたい」って。もうすっ飛んで帰ってあにぎりをつくりました。2皿もつくりましたね（笑）。でも、それもペロッと食べた。それまでどんなことをしても食べられなかつたのに、です。そのとき、息子は大事なことを言ったんです。

「お母さん、僕は僕でよかったんだね。渡辺先生に会ったらそう思った」。

ハッとした。私は親ですから、子どものためにものすごい努力をしましたし、自分の命に代えてでもという気持ちでがんばってきました。でもそれは渡辺さんの考え方とは逆です。つまり「いまのままじゃ困るよ、ほかの子はちゃんとやってるのに」という見方でした。それは「あんたじゃダメだよ」というメッセージにはかならないし、それこそが子どもを追い詰めるものでした。渡辺さんは学校ではなく子ども自身を見ていたんです。だから、子どもが学校と距離を

■奥地圭子(おくち・けいこ)

わが子の登校拒否から親の考え方の大切さを知り、1984年に親の会「登校拒否を考える会」を発足。1985年に教員を辞し、フリースクール「東京シユーレ」を開設。2007年に不登校の子どもに向けた「東京シユーレ葛飾中学校」を葛飾区新小岩に開校し、校長を務める。不登校の子、親とつきあいが長く、不登校についての社会の認識転換と多様な成長が選べる社会づくりに向けて活動し続けている。

とる必要があれば距離をとったほうがいい、と。ついでながら渡辺さんも最初は「学校に行けないのはこの子に問題があるのでは」と思っていたそうです。

渡辺さんとの出会いから価値観を問い合わせ、わが家では価値観が変わりました。

■登校拒否を考える会を始める。

わが家の登校拒否から、これは恥と思ってることではなく皆で考えることと思い、発信しているうち、私のところにはものすごい量の相談の電話がかかってきました。そうですね、朝の5時から深夜の2時ぐらいまででしょうか。親もつらい。そして子どもにとって親の理解が大事。そこで、支え合い・学び合いの場が必要と何か私たちにもできないかと思い「登校拒否を考える会」を仲間のお母さん方と始めました。考える会は今現在も続けています。もう27年間、活動しています。いま全国にはたくさん親の会がありますね。親の会って本当にいいんです。苦しい気持ちを聞いてくれるというのも大きいですが、

聞いているほうもそこから大いに学べる。不登校のことだけでなく、たとえば夫婦間のこと、結婚、嫁姑、介護、そういうことも話し合い、考え方、気づきになり支え合いになっていく。そういうことがあるからこそ、いろんな会がいまでも続いているんだと思います。

親の会ではよく「ありのままを受けとめる」という話が出てきます。でも、子どもが一日中ゴロゴロしていて、ゲームばかりの生活をしていると「あれをありのまま認めるんですか?」と。そういう質問をたくさん受けてきました。たくさんの経験から言えることは、一日中、ゴロゴロしているしかいまはできないんだ、と。ゲームをしていれば一瞬でも「勉強しなきゃ」「学校に行かなきゃ」という気持ちから離れることができる。そういう時間が送れることも精神的に大事なんです。これは一つの例ですが、本当に具体的なことを何度も何度も話しながら経験を蓄積していったのが親の会です。もし親の会が全国的に広まらなければ、もうすこし不登校の歴史は悲惨だったかなと思うほどです。

■フリースクール「東京シューレ」

考える会を立ち上げてから1年半後の1985年、フリースクール東京シューレを立ち上げました。というのも、親の会で理解を深めた家庭の子が元気になっていき、元気になった子どもたちが集まってくるようになりました。その子どもたちが口をそろえて「行く場所がない」と。今までこそフリースクールと言えばドラマにも登場するぐらい名前は知っていますが、当時は学校以外の場というのはまったく皆無でした。私もそういう子どもたちの声を聞いて「ああ、そういう場があれば子どもも楽になるのかな」と思いました。でも、学校以外の場が成り立つかどう

うか、さっぱりわからない。わからないけど、とにかくやってみよう、と。雑居ビルの1階を借りて始めたところ、次々と子どもがやってきて、予想以上に短期に元気になりました。青白い顔の子が1年後ぐらいには頬に赤みがさすようになり、ものすごく厳しい目つきをしていた子の目つきが変わり……、変化は顕著でした。

「こうしなさい」ということをフリースクールでは言わず、ありのままを認めるからこそ、自然と子どもが楽になったり、安心したりして、自分を出していけたからです。本当に居場所があるということが大事だな~、と痛感しました。子どもにとっては自分一人じゃないということがわかるだけでも大きいんです。自分一人が不登校をしているわけじゃなくて、ほかにも同じように不登校をして、いろんな進路を歩んでいる人がいる。それも元気が出る道の一つです。

フリースクールはたんに学校外の居場所であるだけではなく、学校とはちがう文化もつくってきたと感じています。いわば「子ども中心の教育」、子どもたちの声を中心につくっていく文化です。

フリースクールでは東京シューレはもちろん、ミーティング(話し合い)を開くところが多いでしょう。ミーティングでは居場所のルールやプログラムなどを決めます。このミーティングについて「社会に出てから役立った」という声を卒業生からよく聞きます。大学のゼミ、会社の会議、プレゼン……、自分の意見をどう伝えるか、みんなの意見が食いちがったときにどうするか、これらはどんな社会場面でも役に立つことでしょう。あるとき、卒業生で派遣切りにあった青年がいました。青年によれば、会社のやり方があとでもひどく、契約も守らず、いきなりの解雇を言い渡してきた。非常に憤りを感じて派遣仲間

とともに小さな労働組合をつくるて会社に対抗したそうです。そのときに「ミーティングの経験が役立ったよ」と。

東京シユーレの卒業生は1300人。いろんな子がいましたが、ありのままを受けとめて、子どものニーズに応じていくなかで、いいものが生まれてきたと思っています。

■ホームエデュケーションも一つの道

1992年、文科省は不登校対策の方針を取り決める協力者会議において「不登校は誰にでも起こりうる」と発表しました。その年「民間施設に通うことも学校の出席数にカウントできる」という趣旨の通知を文科省が出ました。このとき東京シユーレで起きたのが「出席稼ぎ」のために親が子どもをシユーレに送り込む、という事態です。これにはすごく悩みました。

いろいろと悩み、外国の状況を学んだり、アンケート調査をした結果、「ホームシユーレ」という新しい活動を立ち上げることにしました。日本ではまだ認められていませんが、海外ではホームエデュケーションが認められている国がかなりあります。つまり「家で育つこと」が、教育のあり方の一つに位置づけられているわけです。不登校の子にとって家で育つ時期もとっても大切ですし、その時期を充分にすごせていよい子もかなりいます。家にいるしかない時期にむりやり外に出されて「自分はダメだ」と強く思ったら、その後にも大きな影響を与えます。そこで家にいる子・親どうしがつながり、情報を交換し合えるという環境が必要だ、と。

そうすると「家にいながら人生が開けるの?」という質問をよく受けます。私たちと関わった子のなかにとても恐竜が好きな子がいました。

彼は恐竜が好きで、趣味で恐竜の模型づくりをしていました。とっても上手いんですね。彼がつくった恐竜や怪獣の模型は、版権元からも認められ、今年は郷里高松の博物館で個展も開きました。模型作家で独り立ちしているんです。親も最初は「大学に……」ということも考えていましたが、むしろ好きなことに打ち込める環境をつくってやろうと、そのお金で庭に作業所＆応接室をつくったんです。

また、ほかのある男性は、小学校1年生から不登校をして、ずっと家で過ごしていました。交友関係もほとんど家族かホームエデュケーションの人たち。彼は20代半ばになって就職活動をしました。そのときはまわり中、大卒の人ばかり。そのなかで彼はありのまま、家で育ってきたことを話したそうです。結果はみごと正社員に採用されました。やはり、自分を「ダメ人間だ」と思っていたことが、堂々とした行動をとらせたのかな、と思います。もちろん、就職活動のときに、不登校を言う・言わないは状況次第だと思いますが「主体がどう育ったのか」が大事なところだと思います。

■フリースクールの公教育化を

フリースクールは子どもたちが喜んで通ってくれています。たくさんの卒業生もいます。子ども中心の教育であるフリースクールが公教育の中でもできないか、と思ってきました。これもたしかに一つの道ですが、ずっと二重籍の問題がありました。卒業を認めるのは、現在、通っていない学校です。フリースクールではできません。もっと公的な応援が得られたら、フリースクールで卒業が認められたら、という思いがあり、構造改革特区を使って学校を創ってみようという

ことになりました。

廃校を非常に安い値段で借り、特別な教育課程を編成し、さまざまな規制緩和を活用し、市民だけの力で創りました。通っている子は全員不登校です。それはいい面もありました。「みんなが不登校なので安心」と言う子もいます。通っている子を見て思うのは、不登校であっても、ひきこもりであっても、発達障害であっても、この「自分でいいんだ」と思えることが大事だ、と。一般的の学校では個別対応はほとんどできませんが、この学校では個別対応をていねいに行なっています。もちろん完璧だとは言えませんが、できるだけ個別対応、ありのままのその子から出発する、子どものニーズにていねいに応じていく、そういうことを基本にしています。

私たちは学校なのに「休むことも大事だよ」と言っています。きついのに休めないでいた子は3カ月ぐらい休んだ後、余裕ができて元気になり、「私、休めるようになったね」と言いました。ほかにも最初は緊張していた子がどんどんいい表情になっていくということを見ています。

■つながりあう大切さで未来を

私たちはやはりつながりあうことが大切だと思っています。その一つが「登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク」です。全国ネットはおもに親のつながりです。また「フリースクール全国ネットワーク」では新しい学校外の場がつながっています。こうしたネットワーク団体とはちがいますが、私は「全国不登校新聞社」にも関わっています。1998年に子どもたちの自殺が続いたとき、不登校の人だけでなく学校の人にも「いろんな育ち方ができるんだよ」ということを伝えたくて、みなさんといっしょにつくりま

した。この新聞『Fonte』が日本では唯一の不登校・ひきこもりの専門紙です。私たちがつながることも大事ですが、学校の人、行政の人たちともつながっていく必要性があります。また、子どもたちもつながろうとしています。2年前、「不登校の子どもの権利宣言」がつくられました。不登校の子どもたちが、みずから人権が守られていないと立ち上がった権利宣言です。

こうしたつながり、つながっていこうとする動きが必要なのは、まだまだ苦しんでいる子が多いからです。フリースクール全国ネットワークでは、具体的に苦しんでいる子の状況を変えたいと考え「政策提言」を取りまとめました。政策提言のなかにはフリースクールへの支援、高校無償化に伴う「扶養控除の削減」問題の解消などが盛り込まれています。いま学校に通わない15歳～18歳の子の家庭は、扶養控除の削減によって不公平に負担を強いられているからです。

そして政策提言の最後には「新法をつくろう」と書かれています。私たちもたくさん運動をやってきました。でも、なかなか状況は変わりません。それは普通教育を担う唯一の具体的な教育法が「学校教育法」しかないことに起因します。ここにもう一つ「オルタナティブ教育」と呼べるようなフリースクール教育、ホームエデュケーションなど多様な教育が仕組みとして位置づくような法律が必要です。この道はたしかに困難ですが、ここを突破できないと何十年経っても学校中心は変わらず、苦しい子が次々に出てしまう。それこそ私たちの責務として、つながりあって、力を合わせて、子どもたちが安心して、今の自分を受け入れる状況をつくっていきたい。ぜひ、いっしょにやっていきたいと思っています。

(抄録)

子ども若者シンポジウム

2011年9月24日

斎木彰太、彦田来留未、石井志昂

なぜ学校に行かないのか？ どうして学校に行けないのか？ 理由やきっかけは当事者によって千差万別。でも、経験した当事者の話に耳を傾けると、共通したテーマが見えてくる。今までよくわからなかった子どもの気持ちが見えてくる。不登校経験者3人による“不登校の気持ち”を語ったシンポジウム。

■司会・奥地圭子

私たち全国ネットは「当事者から学ぶ」ということを大事にしています。支援者や周囲の人からの「こうしたらいいのに」という発想ではなく、子ども若者本人がどう思っているのかを軸に考えていく。これが原点だと思っています。今日は3人の若者に登場していただきますが、3名とも不登校です。どうして不登校になったのか、そのときの気持ちやまわりの対応をお話をいただきたいと思います。それでは斎木さんからお願ひします

■斎木彰太さん(北海道・19歳)

不登校は中学校1年生の2学期からです。中学校に入学してすぐ野球部に入りましたが、顧問とケンカになってしましました。バツの悪いことに顧問の先生は担任でもありました。もともと朝起きるのが弱かったし、勉強もきらいでした。しかも担任との関係も悪いのでクラスには入りづらいなあ、と。結果、家の生活が始まり、なんとなくそのままずるずると行きづらくなつていき、中学3年生の10月ぐらいまでは不登校で

した。そのころは「このままじゃダメだな」と思っていましたが、いまの生活が楽だったので、その生活を続けていました。

そのころの学校の対応としては、同級生から数通の手紙が届いたり、先生が家に来たり、技術科の先生と家でなにかをつくったり……、そんな感じでしたね。ただ、自分の意志としては行く気がなかったので、あまりそうした対応は響いてこなかつたですが(笑)。

親は当初からうるさくは言ってませんでしたが、すこしづつ「どうするの？」「行かないの？」と。泣きながら説得されたことも1～2回ぐらいはありました。

家の生活は、昼ぐらいに起きてテレビを見て、ゲームを見て、テレビみて……、と(笑)。同級生に会うのがイヤだったので外にはあまり出ませんでした。

一方、自分のなかでは「このままひきこもり生活を続けていいのか」という不安はありました。フリースクール「札幌自由が丘学園」に通うまでは、真剣には向き合っていなかったように思います。

■彦田来留未さん(埼玉県・21歳)

私の不登校は小学校4年生からです。きっかけは転校だったと思います。転校先の学校は、雰囲気がひんやりしているというかとても暗いという印象がありました。それが日に日に苦しくなっていくということも覚えています。クラスはいま考えると学級崩壊をしていましたんだと思います。すごく騒々しくて、先生はいつもイライラしていました。楽しみだったクラブ活動も先生がとても怖かったです。手芸部にはいつも忘れ物をしてしまう人がいて、いつも怒られました。あるとき、私も手芸部の道具を一式忘れてしました。それで「怒られるな~、どうしよう」と悩んでいたら、先生から「顔色が悪いけど、どうしたの?」と。保健室に行くと高熱がありました。たぶん、それが始まりだったと思います。

それでも1学期はなんとか行きましたが、2学期に入り運動会が終わったあとぐらいに、ある日、布団から出られなくなりました。「行きたくない」という気持ちが体全体から出ていたんだと思います。まったく体は動きませんでした。その後は行ったり行かなかったりをくりかえしましたが、苦しい時期でした。「学校に行けない自分はダメだ」「また休んじゃった」と。

そのとき母親は「なにか理由があるのでは」と思っていたようでしたが、父親は「なんで行けないんだろう」と。家に居ても、すぐに頭やお腹が痛くなったり、体調は崩れやすい状態でした。あと、眠れないというのも長く続いてました。そういう生活が1年ぐらい続いたあと、東京シユーレに通い始めるようになりました。

■石井志昂さん(東京都・29歳)

不登校新聞社の石井と申します。いまから15

年前、私が中学2年生のときから不登校を始めました。いまふり返ってみると「自分が自分でいられない感覚に耐え切れなくなっていく」、それが不登校の理由だったのかなとも思います。

それがスタートしたのは中学受験のために進学塾に通い出してからなんじゃないかと思っています。進学塾は週に4日。バリバリのスバルタ方式でストレスフルな生活を送っていましたが、自分ではその生活に希望を見出していました。「勉強で勝ち抜くことだけが自分の価値だ」と。一方で日常的な万引きが始まっています。盗んだのはあ菓子、漫画、電池……、なんでも盗みました。当時の感覚を思い出すと、ほしい物だから盗む、スリルが楽しいから盗む、ということではなく、目の前にあるから盗んでいたな、と。それから火遊び。親がいないときにゴミに火をつける。「火を見ると落ち着く」という感覚はよく覚えてますが、何がきっかけだったのかまでは覚えていません。

その後、受験日を迎ましたが、すべての試験に落ちてしまいました。ショックが大きかったのか、ストレス度が高すぎたせいか、落ちたことには何も感じませんでした。

結果、地元の公立中学校に通うことになりました。中学校は小学校に比べるといろんなモラルを求められますね。校則では靴下の色から髪の毛の長さまで決まっています。どんなに形骸化したルールでもまかり通ってしまう。ただし、当時の私の想いは、そういう形骸化した価値観でしか受験に失敗した自分には許されていないんだ、と。先生や学校も、形骸化した価値観を毎日、叩き込んでくる。でもやっぱり違和感は禁じ得ない。「こんなのおかしい」という感覚とそれが侵食されていく感覚。そして、どう思あうが考えようが、学校は変わらない、自分の人生も変え



■斎木彰太さん(さいき・しょうた)
北海道在住。19歳。中高時代をフリースクールで過ごし、現在は大学に在籍。アマチュアの劇団にも所属している。(写真・左から2番目)

■彦田来留未さん(ひこた・くるみ)
埼玉県在住。21歳。小学4年生から不登校。現在は、アルバイト、障害福祉施設のボランティアなどをしている。また「不登校の子どもの権利宣言を広めるネットワーク」の代表でもある。(写真・左から3番目)

■石井志昂(いしい・しこう)
東京都在住。29歳。中学2年生から不登校。2001年に不登校新聞社のスタッフになり、2006年からは編集長を務めている。(写真・左から4番目)

られないという絶望感や怒り。いろんな感情が相まって「自分が自分でいられない感覚」が膨らみ、それが暴発するかたちで学校を辞めたんじゃないかなと思っています。

■司会・奥地 不登校になった経緯は人それぞれですが、3人ともフリースクールで育ったという点は共通です。みなさんはフリースクールでどうすごされ、何を感じていたのでしょうか。

■斎木彰太さん

フリースクールには親からの勧めで通うようになりました。初めて行ったとき、感覚的に「いい雰囲気だな」と。ただ入るときは初対面の人とどう話すか、心配だったんです。ずっと家にいたので家族以外の人と話していましたからね。それで入ったばかりのころは誰とも話さず、マンガばっかり読んでいました。よくスタッフからは「入ったばかりの印象と卒業する時の印象はだいぶちがう」と言われます(笑)。きっかけになったのは将棋同好会です。将棋はルールを知っているぐらいでしたが、同好会の人と仲

よくなつたのを機にどんどんほかの人とも仲よくなりました。いまでもいっしょに遊んでいます。

その後、中学校を卒業し、フリースクールの高等部に入っています。そこではすぐに人とも仲よくなれました。フリースクールに行ってからは中学校1年生以来の勉強も始めています。勉強して、遊んで、いろんな人となかよくなつていって……、そんな感じで3年間を過ごしています。

フリースクールに行ってよかったなと思うのは「自分を取り戻せたな」ということです。在籍中は気づきませんでしたが、大学進学したときにそう思つたんです。大学に入ると、まわりはまったく知らない人だらけ。それでも友だちがふとできた。「ああ、変わったんだな」と思いました。でも、それがわかったのはふり返ってみてです。なかにいるときは気づきませんでした。

あと、フリースクールにいて感じたのは、スタッフと会員の心の距離が近いんですね。敬語も使わないですし、代表の亀貝さんも「亀ちゃん」って呼んでますから(笑)。

■彦田来留未さん

フリースクールに入ったのは、不登校をしてから1年後の小学校5年生のときです。シユーレにいる人は、年齢もさまざまめんどうをみてくれた人もいますし、自分たちで何かを決めてやっていくというのがおもしろかったです。ただ、始めのころはシユーレですごく楽しかったことを父に話したとき悲しそうな顔をしたんです。「ああ、やっぱり学校に戻らなきゃいけないから、シユーレで楽しんでいちゃダメなんだ」と思ったのをよく覚えています。私自身も、シユーレに行きながらも「中学校には戻らなきゃ」と思っていたし、学校に行ってたときの苦しさがとれてなかっただので、外に出るのが、つらいときもありました。それで「しばらく家ですごそう」と思い、ホームエデュケーションでやっていくことにしました。でも最初はつらかったです。勉強ができないことに強い焦りがあり、勉強をやろうとしても全然、手が付けられなくて気持ちが重かったです。家で過ごし、体が休んでいく一方で、夜ひとりになったときとかに、学校に行ってたときのことを思い出して、つらかったり、悲しかったり、悔しかったり。そういう気持ちがよみがえって来て泣いちゃうんです。そのときは母がそばにきてくれて、何時間か泣いてやつと言葉にしたら、やっぱりつらくなってまた泣いて……。朝まで母と何度も話しました。ただ、こういう時間があったことで少しずつ楽になったんだと思います。

そういうことを経て、家で自分の好きなことをやり始めたり、母の手伝いをするようになりました。そうするなかで学校に行ってないこと、勉強ができないことへの焦りは自然となくなっていました。その後、また東京シユーレに通い始め、みんなでいろいろなことをやりました。東京シユーレ葛飾中学校の校庭に縦50m、横100m

の巨大なキャンドル絵をつくったときは、すごく感動しました。そして、シユーレのなかでの最後の活動は「不登校の子どもの権利宣言」をつくったことです。権利宣言は不登校の私たちの経験を出し合いながら40時間ぐらい議論して13条の権利宣言案をつくりました。これは2009年の夏の全国子ども交流合宿に採択されています。いま権利宣言ができて一年半が経ち、もっと権利宣言を伝えていく活動をしたいと思い「不登校の子どもの権利宣言を広めるネットワーク」をみんなでつくったところです。これからも活動を続けていきたいところです。

■石井志昂さん

私の場合は中学2年生から20歳まで6年間、東京シユーレに通っていました。

私も齋木さんと同様に居場所を辞めてから「居場所があったからこそ自分が取り戻せたんだ」と気がつきました。その要因の一つがスタッフの姿勢だと思います。「あるがままで」という視点のなかでだけ、不登校の自分を引き受ける覚悟が培われていくんだと思います。不登校をしていると「ふつうになりたい」とか、「学校に行ってる人よりもよくなりたい」とか、そういう気持ちを持ちやすいですし、「学校に行ってる人よりも……」と思いつつも、「何もできない自分」を責めやすくなってしまう。そうではなくて、いまの自分をそのまま引き受けていく。ふつうじゃなくても、“よく”なくてもいい、と。一方、活動はいろんなことをやってました。超高層ビルを非常階段で登ってみたり、コロッケを100個頼んでみたり、棒が倒れた方向に進む散歩をしてみたり(笑)。6年間で印象的なのはＩＤＥＣ(世界フリースクール大会)の運営に深くかかわったことでしょうか。それから民族講座というひとつの講座から興味が興味を呼んで、ついには沖縄

旅行に行ったことも忘れ難い思い出です。

■司会・奥地

それでは最後にいま何をしているか、今後、どんなことをしていきたいか、不登校をふり返ってどう思っているか、をお聞かせください。

■齋木彰太さん

いまは大学2年生です。フリースクールの高等部時代、演劇をやっていましたので、いまは劇団もやっています。大学のほうは単位を1、2個、落としながらも順調にやっています(笑)。

不登校をふり返って思うことは、当時、「ダメだな自分は」と思っていましたが、その経験があったから、フリースクールに行けて、演劇にも出会えて、いろんな人に出会えた。不登校によって終わるわけじゃないんだなって。どんな失敗があっても失敗したから終わりじゃないんだと思えるようになりました。もしいま不登校で苦しんでいる人がいたら、焦らなくてもいい、と。そう言いたいです。今後についてですが、誰に何と言わしようといい人生を送れたと思えるような人生にしたいと思っています。ただ、いい人生だったと思えるようになるためにはどうしたらいいかは模索中です。

■彦田来留未さん

いまはシユーレを辞めてアルバイトと障害者福祉施設でボランティアをしています。それから、シユーレで知り合った人がゲストハウスを運営しているので、その手伝いもしています。ゲストハウスでのおもな仕事は家事なんです。掃除や洗濯、料理は忙しいとたいへんだけど、楽しんでやっています。家ですごしていた時間が長かったからだなあ、と思いました。

シユーレのなかですごしてよかったです

のは、シユーレに通っても、家に居てもいい、どんな自分でもいいと思えるようにしてくれたことです。もちろん家族の考えもあったと思います。そういう環境のなかで、伸び伸び自分のやりたいことがやれたな、と。不登校のときの傷や事実は消えませんが、そのあと的生活は開放的になれて、ゆったりすごせたことはよかったです。中学校も高校も行ってませんが、そういう自分で生きていくんだ、と。このあと、自信がなくなったり不安になったりすることもあると思いますが、自分の好きなことを楽しみながらやっていけたらなと思います。

■石井志昂さん

いまは不登校新聞社で働かせてもらっています。働き始めて最初の衝撃は思想家の吉本隆明さんへの取材でした。吉本さんは「ひきこもらないと物は書けない。それに誰だって、ひきこもらないと自分を保てないんだ」と。このとき、はじめて自分がひきこもりになることへ恐怖を感じていることに気づいたんです。ひきこもることは、なんら悪いことじゃない。そう思いながらも、本当は怖がっていた。吉本さんが指摘したひきこもりの本質を実感していなかったからでしょう。吉本さんはもう一つ大きな指摘をしました。「実感を何度も練ること、そのなかで自分の器ができる」と。誰にだって自分を取り戻していくという作業は必要なんだと思います。私にとってその作業の場は居場所と取材でした。取材のなかで、相手を問い合わせながら自分を問う。正直な自分を語る。これこそが自分の財産です。だからこそ、いまでも不安や焦りはありますが、この道でやっていこうと思っています。

■司会・奥地 当事者ならではのお話、ありがとうございました。(抄録)

当事者の 立場に 立って

平成23年度 引きこもり・不登校に対する支援活動補助事業報告



競輪の補助金を受けて実施したものです。

競輪事業報告書

不登校・ひきこもり支援活動補助事業

編集発行：N P O 法人登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク

TEL&FAX 03-3906-5614

E-mail info@futoko-net.org

WEB <http://www.futoko-net.org/>

発行日 2012年3月31日